

---

書 評

---

Herausgegeben von J.P. Beckmann, L.H. Honnefelder

G. Schripf und G.Wieland:

*Philosophie im Mittelalter*

—*Entwicklungslinien und Paradigmen*—

Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1987, SS. 473

泉 治 典

本書は Wolfgang Kluxen 教授の65歳を祝賀して編まれた論文集である。簡単な序文があるだけで、編集の意図については何も述べられていないが、クルクセンは C. ボイムカーと J. コッホの方法を受けついで、哲学の歴史的批判的意義を明らかにすることを課題として来られた方であるので、「発展の線と諸範型」という副題に見るような内容のものとなったのだと思われる。

全体を5部に分ち、初期スコラから盛期と後期のスコラを経て近代への移行を扱った29篇の論文が収められている。その全部に触れることはもとより不可能であるが、最初に手短かに、どのような論文が寄せられているかを見ておこう。

第I部は「源泉と開始」で、まず G. Schripf がエリウゲナ、ペレンガリウス、アンセルムス、アベラールによって「スコラ哲学の史的概念の首石」を述べている。中世の学問論は予定説や典礼論という信仰の問題と密接に関わって、信仰団体たる祭儀共同体の中から出現したことに注意をうながしている。次に小山宙丸が「中世精神史考」と題して日本人の西欧観にも触れている。日本人は西洋人と同様、宗教と文化が一つになった中世を経験しているので、それを単に近代への移行のためにだけある過去の時とは考えていない、といわれる。3番目はアンセルムス『プロスロギオン』第2章に関する K. Riesenhuber の論文で、これは『中世における自由と超越』(1988,

創文社)の第14章でも読まれる。超越の問題を超越論的に扱って、指向性の概念でもっておさえたのがその特徴である。以上3篇が第I部である。

第II部は「普遍的形態に向かう歩み」で、6篇を収めている。最初に G. Wieland が、12世紀の自然観の中に含まれる精神的側面を「合理化と内面化」という表題で論じている。プラトン主義の復興は自然の原理を示すことで世界の拡大と一元化を12世紀の人々に可能としたが、その際創造信仰が働きかけることによって運命論の脅威を克服し、かつ自由の内的性格を自覚するに至ったのである。自然と恩寵という考えはその自覚の表明であるといつてよい。次に12世紀の倫理学に関して G. Verbeke と K. Jakobi との論文があり（「アベラールにおける倫理学と自己認識」および「道徳論の諸カテゴリー」）、さらに特殊なテーマであるが、Sh. Pines が西方と東方における 'logica vetus' を論じ、S. van Riet がアヴィケンナによる "De generatione et corruptione" のラテン語訳を取り上げている。6番目に G. Jüssen が、オーヴェルニュのウィリアムに注目して、12世紀から13世紀にかけてのスコラ学の変化を示している。ウィリアムはアウグスティヌス主義とアリストテレス主義との不調和の中に身をおいたが、「第二のアウグスティヌス」（ジルソン）として振る舞い、アリストテレスの『靈魂論』の自然学的解釈をこぼみ、エックハルトのように精神の靈的次元を開くことでドゥンスへの橋渡しをした人である。

第III部は「哲学固有の次元」と題して、盛期スコラの諸問題を扱った7論を収めている。まず L. Honnefelder が「形而上学の第2の開始」と題する論文で、中世の哲学はアリストテレスを採り入れることにより、17世紀のみならず19世紀の哲学とも結ばれるものをもったと述べている。ただしこれはアリストテレスの形而上学を、アヴェロエスを通して超越者に結ぶと同時に、啓示に関わる超越論の意味での主体を確保することによってであった。神は 'per accidens' に知られ或いは 'commune praedicatum' として知られるのではなく、自由と完全性の秩序にある 'ens' として知られるのである。つづいて F. v. Steenberghen は「中世における哲学の概念」を寄稿し、その中で1972年の第5回国際中世哲学会を振り返って、中世の哲学を 'philosophia perennis' や 'una et vera philosophia' と呼ぶことはもはやできなくなった、今や哲学の歴史性を問わねばならなくなった、と記している。その点で著者は、M. Gregorius が正統・非正統の両方を哲学史の中に採り入れ、M. Vignaux が哲学と神学の相互作用を明らかにしていることを評価している。そのあと個別問題に関する5篇の

論文がつづいている。J.F. Wippel はトマスにおける実体を偶有の原因として示し、C. Steel は物体の能力の有限性をプロクロスに遡って述べ、L. Hödl は二重真理性の伝承を検討し、R. Macken はアヴィケンナの創造説とゲントのハインリヒによるその解釈を取り上げ、最後に F. Inciarte は‘*Natura ad unum - ratio ad opposita*’と題してドゥンスにおけるアリストテレス主義の変化を論じている。これは‘*natura determinata ad unum*’という原理が相対化されて、自然の中に多くの対立を認めると共に、自然に対する意志の優位が立てられたということである。

第Ⅳ部は「分析と批判」と題して、後期スコラにおける哲学の多様化を考察する論文6篇をおいている。まず P. Beckmann が「全能・自由・理性」と題し、この三者をもって後期スコラの共通項として立てる。自然概念の大きな変化の中で世界の偶存性、全能の物化、個別化がいわれるが、それにも拘らず知性の犠牲に行くことなしに三者の統一が保たれたのは創造者の自由による、とされる。したがって後期スコラについて性急に世界喪失をいってはならないのである。次にオッカムについては、G. Leibold がその自然学的著作の著者問題を取り上げて、“*Expositio in libros Physicorum*”のみをオッカムに帰している。稲垣良典は「レースとシグナム」と題し、この両者をするどく区別するオッカムの存在論は、トマスの神的理性を前提としないとのことを明らかにする。これは次に L.M. de Rijk が、永遠・不変の概念に理性は到達しえないとするオッカムの立場を反形而上学とみなすのと軌を一にしている。そのあと W. Hübener が光の形而上学者として知られるロベルトゥス・アングリクスの形相論と形式主義についてテキストに忠実な論文を書き、また M. Markowski が15世紀のクラコフ大学における哲学研究の状況を報告している。それはおもにトミズムの移入に関するものである。

最後の第Ⅴ部は「変容と連続」と題して、中世から近代への移行を扱う7論文を収めている。まず O. Marquard が「近代以前の近代」と題して、中世と近代との切れ目をドラマ的に見ることの誤りを挙げている。ハンス・ブルーメンベルク（『世俗化と自己主張』1974）がロマン主義の反近代性をあげて、「近代とはグノーシス主義の第2の克服である」と述べたことに沿っていえば、中世はその第1の克服であり、救済への指向において近代と異なる貨幣を用いていたのではない、という。次に J. Sinon が「中世から近代へ」の題で、様相概念の変化を取り上げている。絶対的存在を必然的存在として認識する上での諸前提を考察するところから近代の哲学が始まっ

たのである。つづいて W. Korff が「トマス・アクィナスと近代」でトマス哲学の近代への影響を述べている。トマスにおいて神は被造物の基底ではなく起源と完成であり、人間は有限存在でありつつ神と共働するものとしてその完成を目指すものであった。ここに救済に向けての‘lex nova’があり、人間は理性に根ざす自由の中で働く存在なのである。R. Specht はこれにつづいて自然法にたいする神の拘束を論じている。さらに A. Zimmermann は、ライプニッツにおける存在論的神証明を積極的意味でとり上げ、H. Holz はドゥッンス、ルイス・ド・モリナ、J.G. フィヒテにおける自然の階層の関係性と循環性を論じている。最後に H.M. Baumgartner が「学による価値指向」と題して、学問と教養の関係の変化を述べている。近代の学問にたいして脱イデオロギー化を要求するとしたら、単に価値からの自由を主張するだけではなく、学問の哲学的基礎を確立しなければならないというのがその要旨である。

本論集はこのように全体として見て副題が表す意図をつらぬいているといつてよいが——個々の論文では対立する見解がないわけではないが——、そこから浮かび出る若干の特徴をあげてみよう。それらはつまる所、「哲学の歴史性」に関するものである。

第1は、中世における哲学の展開は神学的なザッヘや場所とのつよい関わりをもっていたということである。哲学の歴史性はそれなしには考えられない。たとえ考えられても自然的な盛衰でしかない。‘credo ut intelligam’が中世哲学の唯一の方法であったのではないが、これなしには哲学の保持と展開はなかったのである。第I部冒頭の論文を書いた Schimpf はエリウゲナの研究者であるが、エリウゲナの少し前のゴットシャルクのいわゆる二重予定説に、中世固有の自由論の動機をおいている。中世哲学はすぐれた意味で生と自由を問うものであって、それは創造・予定・摂理・存在の啓示との関わりで生きかつ展開したのである。本書はこの点を、アンセルムス、トマス、ドゥッンスという各時期での哲学を構築した人々についてよく捉えている。本書の価値はまずここに認められるであろう。ただし多くの論文が形而上学の成立と特質を問うているため、その神学的基盤を聖書解釈に遡って見るような研究は提出されていない。また解釈学を直接のテーマとした論文も本書の中には見当たらない。

第2は、第III部以下で多くの人がドゥッンスについて言及しているが、その際、存在の一義性の追求という合理化をトマスからの頹落のようには見なさず、むしろ積極的

にここでも予定の神との関わりを見、そのような神の超越性が形而上学の根底にすえられたと見ていることが目立っている。オッカムについては問題がさらに鋭化するが、Beckmann (第IV部冒頭) は ‘*potentia dei absoluta*’ と ‘*potentia dei ordinata*’ を二つの異なる力と解すべきではなく、いずれも神の全能の ‘*posse aliquid*’ の二つの仕方と考えるべきだとして、神の全能と自由の矛盾はないこと、すなわち恣意的な自由や理性の無力がそこから帰結するのではないとのことを力説している。トマスとドゥンスないしオッカムとは確かに哲学の性格が異なるが、このような論点は哲学のイデオロギー化を避ける上で重要であり、歴史的批判的な立場からはそのようにいわなければならないであろう。

第3は、本書は形而上学の変遷を追うに際して、神秘主義を別の線上にあるものと見て、殆ど扱っていないという特徴がある。エックハルトはウィリアムへの言及の中でしか挙がっていない。ただしクザーヌスについては第V部で J. Sinon が触れている。アンセルムスやトマスにとって「神を見ること」は思惟の外にある彼岸的なものであったが、クザーヌスによれば把握不可能のただ中での「見られる」という出来事である。これは思惟の立場をこえた体験である。神をあるものとの関係においてとらえることはできないが、見る運動の中で見られたものの像として知られるのである。Sinon はこれについて、哲学の原理は今や哲学の前提となり、その限りで哲学の時間制約性があるという。その前提に従って本質と存在の区別がいわれ、また神の存在を必然的存在として知る弁証法的な「真の思惟」が起こるようになったのだとされる。

この神秘主義の起源と行方について考える時、「近代とはグノーシス主義の第2の克服である」とのブルーメンベルクのテーゼ (Marquard の論文) は簡単には成り立たないだろうことも予想されるが、そのような問題提起は本書の意図から逸脱するかもしれないので、今はあえて問わないでおこう。